イケメン教師の受難

伝説の水泳大会篇

第五巻　プールで公開陵辱ショー

海老沢　薫　著

内容

■著作権について
■まえがき
■第一章　イケメン教師の〇〇に輪投げ
■海老沢薫BLOG
■海老沢薫Web連載小説

※海老沢薫BLOG

http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/

・・・サイドストーリー『イケメン教師の受難　伝説の運動会篇』や、最新作の出版情報、そのほか各種コンテンツ情報などを配信。

■著作権について

「イケメン教師の受難　伝説の水泳大会篇　第五巻　プールで公開陵辱ショー」（以下本書と表記する）の著作権は【海老沢薫】にあります。

・本書のすべての内容は、日本の著作権法、及び国際条約によって保護されています。

・「海老沢薫」が事前に書面をもって許可した場合を除き、本書の一部、または全部を、あらゆるデータ蓄積手段（印刷物、電子ファイル、ビデオ、テープレコーダー）により複製、流用、転載、転売することを固く禁じます。

・著作権の侵害につきましては、著作権法第119条などの罰則がありますのでご注意ください。

■まえがき

高校の水泳大会は二十五歳のイケメン教師、三神真琴にとってまさに極限の羞恥地獄と化していた。

担任するクラスの生徒達の企みにより、予定されていた競技が急遽変更され、イケメン教師を陵辱するための新たな競技がプールの中で行われることになったのだ。

それは、プールのど真ん中に高さ三メートルの脚立を設置し、その上に一糸纏わぬ姿のイケメン教師を座らせて、その剥き出しの股間に反り立つ淫らな棒を目がけて輪投げをするという、高校の水泳大会にはふさわしくない何とも卑猥な競技であった。

仕方なく脚立の上に座った真琴は、プールにいる全員のギラギラした視線を一身に浴びながら両脚を百二十度以上も開かされ、競技の的になった。

やがて、競技が始まるとイケメン教師の淫らな棒に次々と輪が入り、プールサイドで観

戦する生徒達を熱狂させた。

「あぁっ、もう許してくれ・・・」

生徒達の投げた輪が淫らな棒に当たり続ける内に、次第に全身が快感に侵され、脚立の上で激しく悶え狂い始める真琴。

その様子を見た全校生徒や同僚教師達は、プールのど真ん中で喘ぐイケメン教師をもっと辱めてやりたい衝動に駆られた。

而して、担任するクラスの生徒達が見事輪投げ競技で優勝すると、水泳大会を仕切るベテラン男性教師は脚立の上に座る真琴に祝砲を上げるよう命じた。

すでに理性が崩壊寸前の真琴はその命令に黙って従い、全校生徒や同僚教師達が見つめる前で勇ましく反り立つ自らの棒を扱き始め・・・。

暫くして、真琴はプールの中にいるクラスの生徒達に向かって「おめでとう！」と叫びながら、白濁の祝砲を放ったのだった。

■第一章　イケメン教師の○○に輪投げ

高校の水泳大会が行われている屋外プールは騒然とした雰囲気に包まれていた。プールのど真ん中には高さ三メートルの脚立が設置され、四人の三年生男子がプールの中でそれを支え、さらに赤と青の無数の輪がプールの中に投げ込まれて浮かんでいたのだ。

「それじゃあ三神先生、あの脚立の上に早く座りなさい！」

ベテラン男性教師がそう命じると、プールサイドに一人だけ素っ裸で佇むイケメン教師、三神真琴はもはや抵抗する事なく、再びプールの中に入ると、脚立の方に泳いで行った。

プールサイドにいる生徒や同僚教師達は、イケメン教師がプールのど真ん中に設置された脚立に昇る姿を意味深な笑みを浮かべて眺め、これから始まる陵辱ショーに邪な期待を寄せた。

あぁっ、恥ずかしい・・・。高さ三メート

ルの脚立の上に座った真琴は、まるで処刑台に昇ったような気分で、どうしようもない羞恥に喘いだ。

「三神先生、もっと脚を開かないと生徒達が輪投げをしにくいだろ！」

ベテラン男性教師がプールサイドから叱責すると、真琴は顔を真っ赤に染めながら脚立の上でゆっくりと脚を開いていった。

高校の水泳大会でこれから行われようとしている競技は、二年生によるクラス対抗輪投げ大会で、生徒達が輪投げの的として狙うのは他でもないイケメン教師の剥き出しのイチモツだったのだ。

そのため、真琴は脚を大きく開いて生徒達に的を良く見せなければならなかった。また、イチモツも的として機能させるためには空に向かって勢い良く反り立たせておく必要もあった。

こんなの恥ずかし過ぎる・・・。高さ三メートルの脚立の上に座りプール全体を一望す

る真琴は、まるでこれから公開処刑でもされるような錯覚に陥っていた。

真琴のクラスの生徒達は脚立の上で羞恥に震える担任教師の姿を意味深な表情で眺めながら、クラス対抗輪投げ競技の第一試合を戦うためにプールの中へ順番に入った。

「絶対勝つぞ！」

クラス委員の相葉がそう檄を飛ばすと、他のクラスメート達はその声に応えるように拳を突き上げて「オオッ！」と唸り声を上げた。

その様子を脚立の上から眺めていた真琴は生徒達の鬼気迫る形相に酷く怯え、剥き出しのイチモツを恥ずかしいほど痙攣させた。

そうして、試合開始を告げるホイッスルが鳴り響くと、ついにプールの中で卑猥な輪投げ競技が始まったのだった。

競技を戦う生徒達はプールの中に浮かぶ輪を取ると、脚立の上に座るイケメン教師の股間目がけて勢い良く投げた。

「イェーイ！デカ○ンに命中したぞ！」

「よし！先生のチ○コに通ったぜ！」

イケメン教師のイチモツに見事輪が入ると、生徒達はプールの中で大声を上げて喜んだ。

あぁっ、恥ずかしい・・・。高さ三メートルの脚立の上に股を開いて座る真琴は、自らのイチモツに輪が入る度に激しい羞恥と快感に襲われた。

イケメン教師のイチモツはどんどん大きく膨らみ、プールの中にいる生徒やプールサイドのギャラリーの目を大いに楽しませた。

「先生、もっと脚を開いて的を良く見せてくれよ！」

クラス委員の相葉がそう呼び掛けると、脚立の上に座る真琴はさらに脚を広げていき、結局百二十度以上も股を開かされることになった。

「アハハッ、なんだよあの格好！あれじゃあチ○コを良く見てくださいって言ってるようなもんだぜ（笑）」

「なにもチ○コをあそこまで大きく膨らませ

なくてもいいのにな（笑）」

プールサイドから観戦する生徒達は、高さ三メートルの脚立の上で大きく膨らんだイチモツをおもいきり晒すイケメン教師を嘲笑った。

やがて、真琴の反り立つイチモツにはどん

どん輪が入っていき、イチモツは赤と青の輪でほとんど隠れてしまった。するとちょうどその時、試合終了を告げるホイッスルが鳴り響き、輪投げ競技の第一試合は終わったのだった。

真琴のイチモツに入った輪は、脚立を支える三年生男子達が回収し、赤と青の輪の数をカウントしていった。

「只今の試合は青色の輪を投げたクラスの勝利です！」

プールサイドにアナウンスが流れると、真琴のクラスの生徒達は拳を突き上げて勝利の雄叫びを上げた。

「イェーイ！やったぞ！」

「先生のチ〇コを俺達が支配してやったぜ！」

「このまま次も勝って優勝するぞ！」

クラスの生徒達が勇ましい声を上げる姿を、真琴は脚立の上に大股開きで座ったまま、恍惚と憂鬱の入り混じった複雑な表情で見つめていた。

それからすぐに次の試合が始まり、真琴は相変わらず脚立の上に大股開きで座り、イチモツを恥ずかしいほど勇ましく反り立たせていた。そして、そのイチモツには生徒達が投げた輪がどんどん入っていき、真琴はその度にアヘ顔を浮かべた。

「先生、そのままチ○コを大きく膨らませておいてくれよ！」

輪投げ競技を戦う生徒はイケメン教師にそう呼び掛けながら輪を投げ続けた。

あぁっ、もういい加減にしてくれ・・・。

生徒達の投げた輪がイチモツに当たり、刺激し続けるうちに、真琴は次第に全身が快感に侵されてゆくのを感じた。このままだと射精してしまうかも知れない・・・。真琴の脳裏

にふとそんな予感が過ぎった。

輪投げ競技の最中に的となっている教師がもし射精をしたら、プールにいる全校生徒や同僚教師達は一体どんな反応を示すのか、それを想像しただけで真琴は背筋が凍り付きそうになった。

きっと皆、自分の事をド淫乱な男だと思い込み、軽蔑の眼差しを向け嘲笑の的にするに違いなかった。そして、これから先の学校生活がさらに困難を極める事が容易に想像できた。

もう絶対射精するわけにはいかない・・・。

真琴は脚立の上で大股開きをしながら自分自身に強くそう言い聞かせた。

しかし、生徒達はイケメン教師のイチモツに次々と輪を投げ込み、真琴を快感責めにした。

「先生、エロい顔して、もしかして感じてるの？」

「それなら、そこでミルク出しちゃいなよ！」

プールサイドで観戦する生徒達は、イケメン教師が輪投げで感じているのに気づくと、そう言って冷やかした。

あぁっ、何とか耐えるんだ・・・。真琴は唇を噛みしめ、イチモツに襲い掛かる快感に必死に耐えた。

「先生、せっかくだからまたイカせてやるよ！」

「面白ぇ、俺達の手で射精させてやろうぜ！」

プールの中で輪投げをする生徒達はそう言うと、イケメン教師のイチモツ目がけて力強く輪を投げ始めた。

「あぁぁっ」

おもいきり投げられた輪がイチモツに直撃すると、真琴は脚立の上で淫らなアへ顔を晒した。

「アハハッ、先生感じてるぞ！もっとヤレ！」

「先に先生のミルクを出させた方が勝ちにしたらどうだ！」

プールサイドで観戦する生徒達は、的になっ

たイケメン教師が脚立の上で乱れ狂う姿を面白そうに眺め、プール全体が再び熱狂の渦に呑み込まれていった。

プールの中で競技する生徒達はもはや輪をイケメン教師のイチモツに通そうとするのではなく、イチモツにおもいきり当てることに集中していた。

「あぁっ、あぁぁっ」

イケメン教師のオスの鳴き声がプール全体に響き渡り、プールサイドにいる全員が射精の瞬間が訪れるのを心待ちにした。

するとその時、無情にも試合終了を告げるホイッスルが鳴り響き、プールの中にいる生徒達は輪を投げるのを止めた。

「あぁぁっ」

真琴は悲しそうな喘ぎ声を放ち、ホイッスルを鳴らしたベテラン男性教師を恨めしそうに見つめた。

「アハハッ、三神先生、生殺しにされて泣きそうな顔してるぜ（笑）」

「まぁ次の試合でミルク出すだろ（笑）」

「これじゃあまたプールが先生のミルク塗れになっちゃうよ（笑）」

プールサイドにいる生徒達はそう言って、脚立の上で切なそうなアへ顔を見せるイケメン教師を嘲笑った。

そうして、二年生によるクラス対抗輪投げ競技は、愈々決勝戦を迎える事になり、真琴のクラスの生徒達は脚立の上でイチモツを勇ましく反り立たせる担任教師を眺めながら意気揚々とプールの中に入ってきたのだった。

■海老沢薫　ＢＬＯＧ

http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/

・・・連載小説『イケメン教師の受難　伝説の運動会篇』や最新作の出版情報、そのほか各種コンテンツ情報などを配信。

■海老沢薫Ｗｅｂ連載小説

『イケメン教師の受難　伝説の運動会篇』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=36195

・・・二十五歳のイケメン教師、三神真琴はその端正なルックスと気さくで優しい人柄から勤務する高校で女子生徒達のアイドル的存在だった。

しかし一方で、そんなイケメン教師の事を良く思わない男子生徒達もおり、ある日の放課後、真琴は担任するクラスの生徒達の罠に嵌まり、教師生命を脅かすほどの弱みを握られてしまう。

その日から真琴は担任するクラスの生徒達に脅迫されるようになり、自身の教師人生を守るために彼らの奴隷として服従するようになる。

時に教師としてのプライドはおろか一人の男性としての尊厳までを奪われるような屈辱を味わい、どうしようもない自己嫌悪に陥る

こともあったが、それでも真琴は生徒の奴隷として日々懸命に戦っていた。

そうして、学園の一大イベントである運動会の季節が訪れ、真琴はそこでもクラスの生徒達に脅迫されてしまう。

運動会はイケメン教師の羞恥ショーと化し、真琴は全校生徒や同僚教師、観戦に訪れた大勢の父兄達が見つめる前で、途轍もない生き恥を晒すことになるのだった。

『イケメン春輝　二十歳の憂鬱』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=31764

・・・大学二年生の藤島春輝は、大学の学園祭のミスターコンテストに無理矢理エントリーさせられ、そのステージ上で罠に嵌められ、大勢の学生達が見つめる前で死ぬほど恥ずかしい痴態を晒してしまう。

それでも見事グランプリを受賞した春輝は、セレモニーとして一糸纏わぬ姿で大学のキャンパス内を練り歩き、他の学生達の見世物になったのだった。

数日後、ミスターコンテスト実行委員会の学生から連絡を受けた春輝は、毎年恒例のグランプリ受賞者の記念写真集を製作する話を聞かされる。

今年のグランプリ受賞者の春輝は、学園祭のステージ上で前代未聞の痴態を披露した事からヌード写真集にすることが決まり、実行委員会の主要メンバーである須藤から脅された春輝は仕方なく撮影に応じることにな

り・・・。

後日、早速授業中の大教室で撮影をすることになった春輝は、一番後ろの席で須藤に命じられるまま服や下着を脱いでいき、一糸纏わぬ姿でポーズを披露する。

そうして撮影はだんだんエスカレートしていき、イケメン学生は授業中の大教室だけでなく、図書館や学生食堂でも極限の羞恥地獄を味わうことになるのだった。

『イケメン社長　聖哉２５歳　―体を賭けた屈辱の取引―　大型ショッピングモール編』

https://regimag.jp/bo/book_view/?book=18357

・・・吉川聖哉は、大学生時代に起業した二十五歳の若き事業家だった。頭脳明晰で抜群のルックスを持ち、社交的な聖哉はまさにイケメン社長と呼ぶにふさわしい華やかさを備えていた。

大学生の頃には、将来有望な若手イケメン社長として一部のメディアでも取り上げられるなど、他人が羨むほど順風満帆な人生を送っていた。

しかし、いつしか聖哉の会社の業績は低迷し、華やかだった生活は次第に陰りを見せていく。

自分に付いてきてくれる社員のため、そして自分の理想のために会社を立て直すべく日夜必死に働き続ける聖哉。

かつて将来有望な若手社長としてもてはやされていたイケメン社長は、どんな泥臭い仕

事でも引き受けるようになり、心ない取引先やユーザー達からの羞恥の命令にも従い、人生を翻弄されていくのだった。

『イケメン社長　聖哉２５歳　一体で償う屈辱のクレーム　会議室篇』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=38623

・・・２５歳のイケメン社長、吉川聖哉は大学生時代に起業し、若くして成功したカリスマ社長であった。

しかし、聖哉の会社は次第に業績が悪化し倒産の危機に瀕する状況まで追い込まれていった。

そのため、聖哉は会社存続のために新たに人材派遣事業を興し、様々な企業と取引を始める。

そんなある時、聖哉の元に大口の取引先から一本のクレームの電話が入った。取引先の相手は電話越しに聖哉を激しく罵倒し、今すぐ自社まで謝罪に来るよう命じた。

ただでさえ倒産の危機に直面している会社は、この大口の取引先を絶対に失うわけにはいかず、慌てて謝罪へと向かう社長の聖哉。

而して、取引先の会議室へ案内された聖哉

の元に担当部長と現場責任者、そして問題を起こした当事者である聖哉の会社の社員が現れ・・・。

平身低頭に謝罪する聖哉に対し、取引先の相手は誠意ある謝罪を要求し、あまりにも屈辱的な命令を突き付ける。

社長としてのプライドだけでなく、一人の人間としての尊厳までも奪われるような命令に聖哉は憤りを覚えずにはいられなかったが、自分の会社や社員を守り抜くために彼らの命令に従う覚悟を決め、ついに底なしの羞恥地獄へと堕ちていくのだった。